

昭和63年度
(1988)
第28回大会

男子優勝 東海大四 女子優勝 札幌清田

【 専門委員長 寸評 】

男子団体戦は、東海大四対札幌岩の決勝戦、札幌岩の奮闘を期待したが、東海大四が順当に2年連続2回目の優勝を決めた。

女子団体戦は、札幌清田が他を全く寄せ付けず、5年連続8回目の優勝を飾った。

男子個人戦では、藤沢、山田、伊佐治の東海大四勢の三つ巴となったが、山田が藤沢を降して初優勝。女子では森（札幌清田）が単複ともに他を圧倒して三冠を手にした。全般的には、札幌地区以外のレベルが向上しており、相木（旭川東）など来年が楽しみである。

【 全国大会 】

男子団体戦は、昨年とほぼ同じメンバーで臨みながら、昨年以上の成績をあげることができなかった東海大四。同様に、ベスト8進出をねらった女子の札幌清田もベスト16に終わった。

個人戦においても、藤沢（東海大四）、山田（東海大四）、森（札幌清田）、金沢（札幌清田）の上位進出が期待されたが、満足の得られないものであった。

今回、不振の一番の原因に挙げられるものは暑さによる体力の消耗と思われる。来年は、はまなす国体も控えて、このようなことのないよう、十分な対策を考える必要がある。有望な2年生の来年に期待したい。

（ 専門委員長 緒方 寿人 ）

優勝のよろこび

男子 東海大学第四高等学校

我々東海大四高校の硬式庭球部は、昨年の4月に出来たばかりです。昨年の10月までは学校にコートがなく、バスと地下鉄を使って、コートまで通っていました。しかし、そ

んなハンディキャップを乗り越えて、昨年の団体戦は、初出場ながら全国大会へのキップを勝ち取りました。今年はコートも完成し、昨年よりも密度の濃い練習ができたおかげで、2年連続の北海道代表の座をつかむことができました。

東海大四高庭球部の特徴は「少数精鋭」です。部員はわずか5人で、練習中も大会中も、おのおのが役割を果たさなければ、クラブ自体が動いていきません。ですから、人数は少なくても個人個人のレベルは北海道のトップクラスなのです。個人戦ではお互いにつぶし合うことも多く、チームメイトをライバルと考え、練習に、試合に励んできました。

北海道の庭球は、長い間、札幌藻岩高校がリードしてきました。昨年は「打倒、藻岩」を目指してきましたが、今年は優勝旗を守る側にいます。相手のプレーヤーだけが敵なのではなく、「勝たなければ」というプレッシャーが手強い敵になって我々を襲ってきました。この敵は予想以上に強大なものでした。ですから、そのプレッシャーをはねのけての勝利は、とても良い経験となり、新たな自信を生み出してくれました。この経験と自信をバネとして、これからの試合にも生かしていきたいものです。

(東海大学第四高校 主将 藤沢 剛)

優勝のよろこび

女子 札幌清田高等学校

私たちの高校生活最後のインターハイは、団体戦と個人戦単複の3冠すべてで優勝することができた。全国大会出場を目標に、毎日厳しい練習を積み重ねてきた成果である。

「テニスがうまくなりたい。強くなりたい。そのために清田で緒方先生の指導を受けたい」そんな思いで私が室蘭から札幌へ来たのはもう2年以上前のことである。初めて清田の練習を見学したとき、部活動未経験者だった私は、その厳しさに圧倒されたことを憶えている。「田舎のテニス」しか知らなかった私を指導してくださった緒方先生のご苦勞はどれほどのものであったかと考えると、頭の下がる思いである。

清田高校庭球部は大変伝統のあるチームである。いつも「伝統を守らなければ」という責任感の中で試合をしてきた。だからこそ、団体戦の優勝が何よりも嬉しかった。表彰式で団体戦の優勝旗を受け取るとき、「今までみんなで力を合わせて頑張ってきたんだ」という思いで胸が詰まり、涙がこみ上げてきた。テニスのことで涙を流したのは、これが初めてだったと思う。それほど、この優勝が嬉しかったのだ。

今の私があるのは、緒方先生のご指導があったからこそだと深く感謝している。これからも、先生の口癖である「継続は力なり」を座右の銘として頑張っていこうと思っている。

(札幌清田高校 主将 森 千晃)

全国高校総体（第78回全国高等学校庭球選手権大会） 兵庫

8月1日～7日

神戸総合運動公園テニスコート

神戸市外国語大学テニスコート

男子	個人戦シングルス	優勝	山本 育史（堀越）
女子	個人戦ダブルス	優勝	伊達 公子・高木 紀子（園田学園）
	シングルス	優勝	伊達 公子（園田学園）
		準優勝	遠藤 愛（福山暁の星）